

巻 頭 言

『学苑』6月号として初等教育学科紀要が刊行されるようになって今年で19年になる。この形での学科紀要の発行は今号をもって終了するが、最終号をこのような状況で迎えるとは思ってもよらなかった。新型コロナウイルスの感染拡大による仕事と生活環境の激変である。

大学の前期授業は全てオンラインでの実施となり、我々教員もこれまでの授業コンテンツをオンライン用に再構成する作業に追われた。機材の扱いや配信手続きに戸惑いながら授業を開始し、ようやく慣れたと思っても、授業時のネット環境の不具合で準備した授業コンテンツを意図したクオリティで学生に届けられないこともあり、日々、試行錯誤の連続である。

もどかしさが募る一方で、新たな気づきもある。オンライン授業では、どの学生にも等距離で接することができる。教室の前方に座っている学生と後方に座っている学生と、教師も何となく心理的な距離感の差を感じる教室の対面授業と異なり、等分に区画されたズームの二次元画面に映る学生たちは、皆平等である。学生の方は分からないが、自分自身はオンライン授業の方が一人一人の学生との距離が近くなったと感じた。言葉でやりとりしている限りでは、オンライン授業によって活性化する部分もある。

だが、これが音楽や演劇、身体表現（ダンス）のような非言語コミュニケーションになると、全く様相が異なってくる。そもそも演者と観客（聴衆）が空間を共有し、その空気の振動や波動のベクトルを五感からダイレクトに受けとめるパーフォーミング・アーツは、オンライン上では成り立たないのだ。4月以来、自身が受けもつ音楽や表現の授業で葛藤が続き、学生たちに伝統楽器に触れてもらいたいと1年以上も前から準備していた長唄三味線のワークショップも断念せざるを得ないかと悩んだ。しかし、外部講師を依頼した吉住小三代先生の「ズーム授業、やってみましょうよ」の一言で実施が決まり、そこから先生のご家族も巻き込んで談論風発の打ち合わせが始まった。楽器も用意できず、学生たちと直接対峙することもできない、ないない尽くしの状況で何ができるか、無人島でのサバイバルゲームの如くアイデアを出し合い、知恵を絞った。学生たちに長い傘を三味線の棹に見立てて構ってもらい、左手を上下に滑らせて、勘所（ポジション）の距離感をつかむという奇策を提案したのは小三代先生ご自身である。重要無形文化財保持者の先生が傘を使ってお稽古とは前代未聞だが、この状況を誰より楽しんでおられたのも小三代先生であった。

追い詰められた状況の中で、人はより創造的になると学んだ。新型コロナウイルス禍がもたらした仕事と生活様式の変化は辛かったが、何を優先し、何を断念するか、自分の仕事の本質についてひたすら思考してきた日々は、確実に次へ進むための糧となるであろう。困難な状況にも拘わらず、今号に寄稿された先生方に心からの敬意と感謝を表しつつ、またいつの日か、別の形で学科の教育学・保育学の研究成果を世に問うことができることを願ってやまない。

（初等教育学科長 永岡 都）